

カップル御用達 横浜新名所創造源 — 1日NKK研究所体験記 —

林 幸, 花田 剛 / 東京工業大学工学部金属工学科修士課程 (学生会員)

都会の中の工業地帯

8月25日(水)は、先日までの「らしくない夏」とはうってかわって、例年並みの暑さに見舞われた。この日朝、『職場ウォッチング』に記事を書けるためNKK総合材料技術研究所及び基盤技術研究所を取材すべく、取材班はまず川崎駅時計台下に集合。タクシーで一路NKK技術開発本部へと向かった。いかにも都会的な街並みの続くその先に、NKKの工業地帯はあった。工業地帯というものは、海に近いところにあるものと思込んでいた取材班は、「なんて都会にあるのかしら!」と思わず感激してしまったのだった…。



NKK技術開発本部 (京浜ビル)

新素材見本市—テクノプラザ—

正午に技術開発本部へ到着。今日一日案内してくださる技術企画部の田野村さんが、笑顔で出迎えてくださった。ライトグリーンの制服が何とも清楚。そしてまずは、社員食堂特別室でカメラの試し撮りをしながら昼食。この記事に写真は欠かせない。例え食事をしながらでも、取材班はお仕事を忘れていないのだ。

食後、最上階のNKK全貌を見晴らせる会議室で、ビデオを使った研究所の概要説明を聞き、研究内容や設備の見学に入った。技術開発本部 (通称京浜ビル) 1階のテクノプラザ (新技術展示室) には、NKKが最近開発した数々の新素材が展示されている。特に目を引いたのは、超塑性チタン合金SP-700で作られた、見た目より全然軽く複雑な形状をした工具やスポーツ用品の数々。様々な美しい色彩を持つカラーチタンパネル。そして実際に製菓会社に出しているという、全体がくまなく均一に温まるすぐれものの鉄板 (のようなもの) だ。

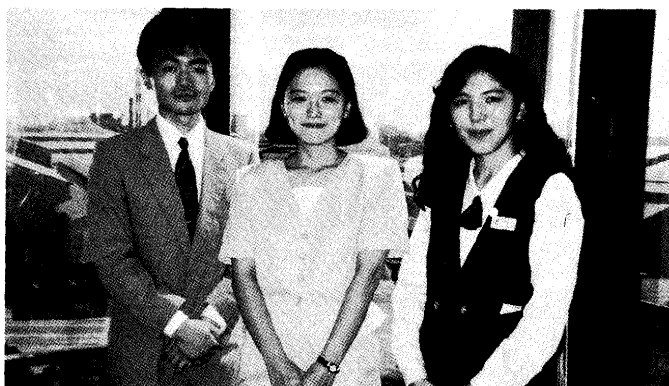
フレキシブルNKKの神髄に迫る—研究設備見学—

貸切りマイクロバスに乗って、京浜ビルとは目と鼻の先にある研究所群へと向かった。いよいよ研究設備の見学。最初にみせていただいたのは、レーザー溶接試験設備。レーザー溶接は、普通の溶接より加熱部の面積が小さいので、異なる厚さの薄板でもきれいに溶接できる。

次は、先ほどテクノプラザでも見たSP-700という新開発チタン合金の機械的性質を測定している各種試験装置。SP-700は700℃台という低温度で超塑性が出現し、従来のチタン合金より加工性の良いことがウリなのだそう。

3K無人化対応設備の開発現場が次の見学場所。ここでは、今まで人間の手で行っていた単調な重労働をしてくれる色々な新型ロボットを開発している。まだ完全に実用化していないが、これらが実際に活用されたら製鉄所も大きく様変わりするだろう。ロボットのおかげで、「3K」という言葉が死語になる日も近いと取材班は感じた。

最後に、スリッパにはき替えて風洞実験設備 (Wind Tunnel) の見学。実験装置は巨大、と言うか、建物自体が実験装置といった感じだ。まずトンネルがあって、その中に橋の模型を置く。トンネルの端には巨大な扇風機があり、それでトンネル内に向かって台風13号 (8月末に東京を襲ったあれです) 以上の風を送りこむ。こうして色々な種類の風に耐え得る橋を設計するのだそう。実際に、今をときめく横浜ベイブリッジの半分は、NKKが造ったこと。エアロダイナミック的に優れたデザインの特徴であるベイブリッジを思い浮かべる。フレキシブルNKK…。長大吊り橋模型がNKKならぬNHKに貸し出されていて、あいにく拝見で



技術開発本部 8階の会議室にて。
左より花田, 林, ご案内いただいた田野村さん。

きなかったことは、何とも残念。でも、NHKの番組でこの模型を見た時は、「これはね…」と製作者のようにいばって説明してやるぞ…。

寮も仕事も文句なし—研究員の日常生活—

さて、取材班は再びマイクロバスで京浜ビルに戻り、夏の名残りの陽光がさしこむ8階の会議室で東工大OBの栗木さん、村田さん、OGの毕さんから話をお聞きすることになった。まずは月並みな質問だが、

「社宅や寮はこの近くにあるのですか。この研究所自体が首都圏にあるのですから、社宅や寮もきっと交通の便がいいのでしょうか。」

とお聞きしたところ、研究員の方々はよくぞ聞いてくれたと言うようにニヤリと笑われ、

「ええ。独身寮は一人部屋ですし、家賃が安い上に地の利が良く、東京にも出やすい場所にあり、ショッピングや遊びには事欠きません。」

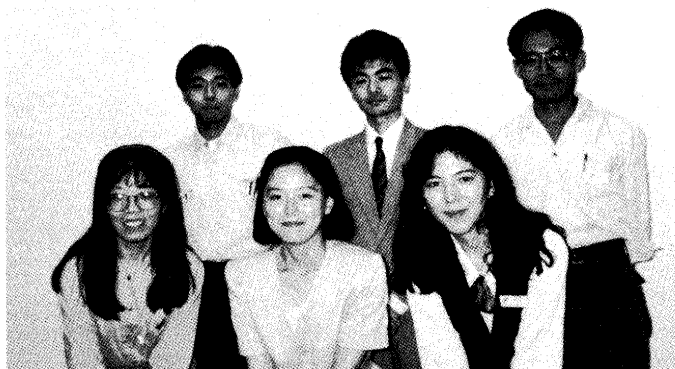
「既婚者用の社宅も同様です。」

さすが、NKK、プライベートライフの充実は思った通り。では、お仕事の方は、

「研究所の雰囲気はどうか。」

「それぞれの研究所によってカラーはありますが、総じて研究上においても、その他のお付き合いにおいても、上司部下の隔たりはあまり感じません。皆思っていることを率直に意見し合い、和気あいあいといった感じです。」

入社3年目の毕さんの説得力ある掛け値なしのご意見。こういう場から、NKKの「ものづくり」研究が生まれるのだと実感した。



懇談の後、出席者の皆さんと

後列左より村田さん、花田、栗木さん。前列左より毕さん、林、田野村さん。

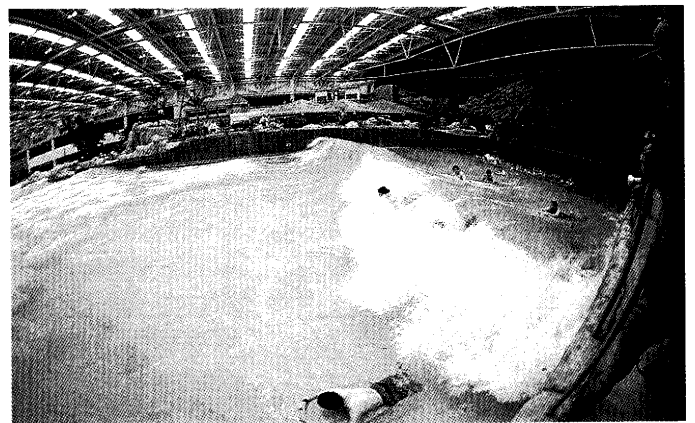
ストレス解消空間—ワイルドブルーヨコハマ—

最後にお待ちかね、鶴見駅からタクシー初乗り運賃でいける都会に一番近い南の島—ワイルドブルーヨコハマ(NKKが開発した室内造波プール)の見学。プールを見渡せる瀟洒なレストランで、このプロジェクトにたずさわったアーバン

リゾート開発チームの大河内さんからお話をうかがった。

このウォーター・テーマパークは、「心の島—An Island of the Mind」をモチーフに、来島者が非日常的な夢の時間を体感できるよう、ソフト面・ハード面で様々な工夫がこらされている。ソフト面でいえば、プールのある室内は全体がブルーの照明になっており、ヤシの木の島あり、南国のバンガロー風建物ありとムード満点。夜はウォーター・スクリーンをバックに、レーザー光線による光と音のトワイライト・ウォーター・ファンタジーが繰り広げられ、カップルには最適だ。

ハード面は、プールに活かされているNKKが他分野で培ってきた技術。その一例が造波装置で、いかに少ないエネルギーで大きい波を発生させるかということに、NKKの技術力が活かされている。また、外気の温度によってプール水温を変え、常にプールに入る人が馴染みやすい水温にするなど、ここまできると「リゾート工学」と言うべきだろう。横浜の新名所を造りだす「ものづくり」パワーの底力を見た取材班であった。



ワイルドブルーヨコハマ

波の次は雪？

午後6:30、良い写真がとれているか若干の不安と記事を書くプレッシャーを感じながら、取材班は川崎駅で解散した。

いきいきと楽しそうに案内して下さった田野村さん、研究設備をていねいに説明して下さった研究員の方々、取材班の質問に率直に答えて下さった栗木さん、村田さん、毕さん、ヒタイに汗して「夢の空間」を語って下さった大河内さん、そしてこの取材計画をサポートして下さった鉄鋼技術総括部の芳賀さん。どうも有り難うございました。

ワイルドブルーヨコハマの見学にすっかり気をよくした取材班は、次に「ザウス」(NKKが造った室内スキー場)のテクノロジーにアプローチする、いやできればしたいとひそかに思っている。既にスキー用具の手入れは整った…。

(平成5年9月10日受付)